



著者プロフィール

今瀬剛一（いませ・ごういち）

昭和11年 茨城県生まれ。

昭和36年 「夏草I入会。

昭和46年 「沖」創刊とともに参加、能村登四郎に師事。

昭和61年 「対岸」創刊主宰。

俳人協会理事、日本ペンクラブ会員、日本文藝家協会会員。

著書に、句集『対岸』ほか7冊、評論集『季語実作セミナー』『余情の文学』『芭蕉体験・三冊子をよむ』『新・選句練習帳』ほか。

〈句集『水戸』より転載〉〈2007年9月10日時点〉

『水戸』（自選十五句）

今瀬 剛一

降りるとき羽は使はず初雀
風過ぎるときに輝き薄氷
咲き満ちてなほ咲く桜押し合へる
紅海は水戸の血の色咲きにけり
春立つやマイクは吐息まで拾ふ
登四郎の呆と口開け鳥雲に
初秋刀魚氷より出る口の先
ぶつかつて頭の固き冬の蠅
唇の凍えて南部言葉かな
満開の桜の上に桜咲く
湧き出でし分だけ零れ秋の水
恐いものなし秋天の肩車
とめどなき黄落なれば眼をつむる
入りたるところより出て紅葉山
木枯や芭蕉はいまだ旅にあり